

## 【報告書】

## 第9回福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会について

## 間 　　ふ 　　さ 　　子

## 1. はじめに

2009年より始まった福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会は2017年の発表会が9回目となる。本年度は9月23日(土)にエルガーラホール7階の多目的ホールで行われ、中国の劇映画1本と中国のアニメーション2本、計3作品を上映した。劇映画は、学生の有志が参加する一年間の勉強会を経て日本語字幕を制作した「大李、小李和老李」(日本語タイトルは「李さんスポーツ奮闘記」とした)、アニメーションはいずれも二年生の正課の授業で日本語字幕をつけたものであるが、今回はそのうち「三十六個字(三十六文字)」を日本語吹き替えて、「小鯉魚跳龍門」を日本語字幕で上映した。「三十六個字」の父親役と息子役の台詞は吹き替えを担当する本学科の学生がそれぞれ準備し、本学の音声学実験室で収録を行なった。「小鯉魚跳龍門」(日本語タイトルは「龍門を跳び越えろ」とした)は、二年生の授業ではダイジェスト版に字幕を付けたが、それをベースとして、8月に本学の教育研修施設やまなみ荘で行った二泊三日の合宿に参加した一年生が、OBの指導を受けながら、字幕のついていなかった部分に字幕を付けた。これまで夏の合宿に参加した一年生は先輩たちの劇映画の推敲に黙ってつきあうだけで今一つ達成感がなかったと思われるが、今年は自分たちが積極的に発言して字幕を完成させることができ、中国語学習のみならずアクティブラーニングとして一定の教育的効果も上げ得たと信じる。

本成果発表会は2013年以降中国映画のみの上映となっているが、いずれは日本語映画に中国語字幕を付ける試みなどにも挑戦したいと考えており、成果発表会がつねに「東アジア地域」を意識していることは一貫して変わっていない。

今回も本学科の学生のほか工学研究科の中国人大学院生が参加したほか、本学科の卒業生や学外からの参加者もあった。回を重ねるごとに参加者の幅が広がっているのも本活動の特徴になりつつあり、これも喜ばしいことだと考えている。

以下、その成果発表会について簡単ではあるが概要をまとめておきたい。

## 2. 実施報告

## 2-1. 事業名

第9回福大生による東アジア映画字幕制作成果発表会

## 2-2. 概要

このプログラムは、人文学部東アジア地域言語学科の有志学生と教員が協力して、1950、60年代の作品等、普段あまり見ることのできない韓国・中国映画に日本語字幕を付け、その成果を市民に公開しようと2009年から始めたものである。9回目に当たる本年は1962年制作の劇映画1本、1958年制作のアニメーションに日本語字幕を付け、さらに1984年制作のアニメーションは日本語吹き替えて上映した。この事業はアジアフォーカス・福岡国際映画祭2017協賛企画である。

## 2-3. 内容

- (1) 日時：2017年9月23日(土)
- (2) 会場：福岡天神エルガーラ7階多目的ホール
- (3) 主催：福岡大学人文学部東アジア地域言語学科
- (4) 協力：福岡大学工学研究科資源循環・環境工学専攻
- (5) 後援：福岡市、福岡市教育委員会、アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会
- (6) プログラム：13：30 開始  
                   13：35 中国アニメーション「龍門を跳び越えろ(小鯉魚跳龍門)」上映  
                   13：54 中国アニメーション「三十六文字(三十六個字)」上映  
                   14：15 中国映画「李さんスポーツ奮闘記(大李、小李和老李)」上映  
                   15：38 終了
- (7) 入場料：無料
- (8) 上映：プロジェクト投影

## 2-4. 上映作品

- (1) 中国映画「李さんスポーツ奮闘記(大李、小李和老李)」1962年、監督：謝晋、脚本：于伶、謝晋、伍黎、葉明、梁延靖、姜榮泉、出演：劉俠声、姚德冰、范

哈哈、上海天馬電影制片廠制作83分（日本語字幕）

- (2) 中国アニメーション「龍門を跳び越えろ（小鯉魚跳龍門）」1958年、監督：何玉門、脚本：金近、撮影：段孝萱、上海美術電影制片廠制作19分、1959年第一回モスクワ映画祭アニメーション部門銀盾賞受賞（日本語字幕）
- (3) 中国アニメーション「三十六文字（三十六個字）」1984年、監督：徐景達、脚本・キャラクターデザイン：阿達、撮影：王世榮、上海美術電影制片廠制作11分、1986年第七回ザグレブ国際アニメーション教育映画賞受賞（日本語吹替）

## 2-5. 参加者数

のべ125名。

## 2-6. 配布物

- (1) チラシ（大学公式ホームページおよび学科ホームページにも掲載。）
- (2) リーフレット（当日会場にて配布。後掲。）

## 2-7. 情宣・報道など

- (1) アジアフォーカス・福岡国際映画祭公式HP
- (2) 福岡大学公式HP
- (3) 福岡大学人文学部東アジア地域言語学科HP
- (4) Fula語学学習会FACEBOOKページ
- (5) 西日本新聞2017年9月7日朝刊
- (6) 朝日新聞2017年9月12日朝刊
- (6) 西日本新聞2017年9月22日朝刊（まちナビ）

## 2-8. 観客の感想（全36通、のべ116件）

- (1) 中国アニメ「龍門を跳び越えろ（小鯉魚跳龍門）」に関するもの：のべ25件
- (2) 中国アニメ「三十六文字（三十六個字）」に関するもの：のべ23件
- (3) 中国映画「李さんスポーツ奮闘記（大李、小李和老李）」に関するもの：のべ49件
- (4) その他全般的なご意見：のべ19件  
詳細は後掲。

## 2-9. 字幕制作参加者

教員：2名。

学生：人文学部東アジア地域言語学科 25名、工学研究科資源循環・環境工学専攻修士課程院生（中国人留学生）1名 計26名。

このほか中国語ネイティブの本学非常勤講師1名、九州産業大学修士（中国語ネイティブ）1名にアドバイザーとして協力を得た。

内訳は以下の通り。

| 1年次 | 2年次 | 3年次 | 4年次 | OB | 院生 | 計  |
|-----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 9   | 6   | 0   | 6   | 4  | 1  | 26 |

※準備期間が2015年度後期から2016年度前期に亘ったため、学生の学年は2016年度現在のものを示し、2015年度の最高学年在籍者はOBとして表示した。OBにはそれ以前の卒業生2名を含んでいる。

※一年次生は夏の合宿および成果発表会本番に参加。

## 3. 字幕制作について

基本的に前年と同様のスケジュールで進めた。

- (1) 第8回発表会（2016年9月）を終えた翌10月から、今年度の作品「大李、小李和老李」のセリフの読み合わせを週1回（月曜4限）の勉強会として行い、中国語のセリフの直訳を作る。2016年後期は最高学年（四年）が2013年度入学の学生、および2014年度入学の三年生がこの勉強会に参加した。2015年度入学の二年生には参加者がいなかった。2017年前期は三年が四年生となり、それに留学から戻った2013年度入学の学生1名が加わり、さらに2016年度入学の二年生6名がメンバーに加わった（うち1名は韓国コースの学生）。このセリフの読み合わせは2017年7月上旬まで行われた。やり方は中国語字幕つきの映像と中国語のセリフを投影するパワーポイントを組み合わせ、一つ一つのセリフを読み、意味を確認していくというもので、この方法はここ数年変わっていない。読み合わせ後は各シーンを一人が担当して日本語訳を作る。今回も各種連絡を始め、さまざまな資料やファイルのやりとりにもoodleを利用した。
- (2) 7月下旬、本学音声学実験室で「三十六個字」の日本語吹替版を収録した。
- (3) 7月の試験終了後、学生メンバーが数分間ずつ分担し字幕の初稿を作成した。
- (4) 初稿完成後、一人が一つの役柄のセリフを通して推敲する「役柄別推敲」を行い、推敲後のファイルを集団推敲に於いて用いるファイルとした。
- (5) 8月下旬に本学の研修施設やまなみ荘にて2泊3日の集団推敲合宿を行い、そこで「大李、小李和老李」のゼロ号を完成させた。
- (6) 合宿では、一年生がOBの指導のもと「小鯉魚跳龍門」の字幕制作を行った。この作品では若者言葉や口語を多用した字幕に挑戦した。
- (7) 合宿後最後の推敲を行い定稿とした。
- (8) 9月は主としてリーフレット制作を行った。
- (9) 発表会当日は、受付や司会、案内などを学生が担当した。

今回も時間割の関係上、平日に一年から四年までの学



生が一堂に会して勉強する時間を確保することができなかった。そのため前回と同様、1月末の時間割編成の際に二年次から四年次までが揃うことのできる時限を1コマ確保し、そこで勉強会を行った。一年生へは8月末の推敲合宿への参加を案内し、今回は9名の参加者を得た。また推敲合宿には現在九州大学修士課程で学ぶ学科のOBも参加してくれた。上級生の経験を下級生と共有し引き継いでいけるよう今後も工夫を続けていきたい。

#### 4. 成果発表会当日について

今回も例年同様エルガーホール（多目的ホール）をお借りした。ただこのホールは大型のスクリーンが備え付けではないため外部から調達せざるを得ず、その分の費用が嵩む。とはいえ、上映するのが古い映画で、映像そのものが十分にクリアではないことから、上映効果を確保する意味でも大型スクリーンの使用はぜひ継続したいところである。

過去8回の発表会において当日お客様から決まって出る注文は、前の人の頭が邪魔になって字幕が見えにくい、ということである。

そのため今回も前回同様、椅子は観客が位置を調整できるように咬ませないで置いていただいた。また昨年の観客からのアドバイスに従ってプロジェクトの周囲に椅子を置かないようにした。また、字幕がなるべく上に出るよう、画面に向かって右側に縦書きで表示し、1行の文字数を極力抑え、極力画面上部に出すよう気を配った。

中国が特別な国ではなくなっていることを反映してか、観客数はここ数年あまり伸びていない。今年とはくに、アンケートでもご指摘があったとおり、アジアフォーカス国際映画祭の会場などにチラシを置けなかったため、前年より観客が減ってしまった。来年以降はこの点をもう少しきちんと準備・手配すべきだと反省した。

なお、上にも記したように、当日の受付や司会、放映などは、勉強会に参加している学生が行った。

#### 5. 当日配布したリーフレット

今回も教員と学生の共作でリーフレットを制作し当日の来場者に配布した。内容は以下の通り。（後掲資料参考）

- (1) 間ふさ子「謝晋の映画について」
- (2) 甲斐勝二「1962年、父と息子の関係から」
- (3) 種村理恵「字幕付け作業について」
- (4) 房瑞麗「私の感想」（翻訳：中願寺桃佳）
- (5) 今村紀秋「1960年代の国有企業の労働者の暮らしの特色」
- (6) 太田梨沙、清瀬彩喜、満永みなみ、山田実奈、増永奈央、田口祐希「中国と日本のラジオ体操について」
- (7) 間ふさ子「指による数の表示」

- (8) 花田優香「上映前に要チェック、『大李、小李和老李（李さんスポーツ奮闘記）』人物相関図」
- (9) 字幕メンバー紹介（花田優香、中願寺桃佳、今村紀秋、小串六美、山田実奈、増永奈央、清瀬彩喜、太田梨沙、田口祐希、満永みなみ、白水優衣、原田優季、松村妃奈美、宮川方孝、井上和真、奥窪佑泉、神代新、渡辺夏海、里森麻美、雷静）

#### 6. 観客の感想（順不同、記述のまま）

アンケート総数36人、うち男性11人、女性13人、性別無記入12人

（10代1人、20代5人、30代4人、40代3人、50代8人、60代8人、70代5人、80代2人）

##### 6-1. 観覧作品

- ① 中国アニメ「龍門を跳び越えろ（小鯉魚跳龍門）」…23人
- ② 「三十六文字（三十六個字）」…25人
- ③ 中国映画「李さんスポーツ奮闘記（大李、小李和老李）」…26人
- ④ 全て観覧…22人
- ⑤ ①・②のみ…2人
- ⑥ ②・③のみ…2人
- ⑦ ③のみ…2人
- ⑧ 無記入…9人

##### 6-2. 中国アニメ「龍門を跳び越えろ（小鯉魚跳龍門）」について

今回、口語を多用した字幕を付けてみましたが、これについてどう思われましたか。

- ・好！省略があったが、やはり訳した方がよかったのでは？（70代・男）
- ・今風で若い人にはよいと思います（60代・男）
- ・超・ヤバイ等、学生らしくて良いと思いました。映像の古さとのミスマッチが新鮮でした（50代・女）
- ・子どもと大人の言い方と合致して良かった（70代・男）
- ・中国語の字幕を付けて欲しい（60代）
- ・分かりやすかった（80代・男／50代）
- ・上手かったです（60代）
- ・堅い日本語に囚われず字幕が付けられていたので非常に楽しく見ることができました。（30代）
- ・子どもの鯉の感じが出ていて良かった。水面を指すのも「上」、龍門を探して川の上流へ行くのも「上」と訳してあったので、区別した方がわかりやすいと思います（50代・女）
- ・今の言葉使いでおもしろかった（50代・女）

- ・わかりやすかった。めっちゃ綺麗、面白い、現代の言葉を使うのも時代がわかる (70代・女)
- ・超、めっちゃ、ガチなど新しい言葉が新鮮でした (60代・男)
- ・おばあさんの「マジか」以外はとくに気にならずに楽しく見ることができました (20代・女)
- ・子供らしく台詞があって、生き生きして良かったです (40代)
- ・かわいらしかったと思います (20代・女)
- ・「婆さん」だけが気になりました (70代)
- ・若者らしい字幕でおもしろかったです (20代)
- ・とても馴染みやすい表現が多く、見ていて楽しかったです。「ガチだ」等今どきの言葉もあって面白かったです (20代・女)
- ・とても見やすい字幕でした。子供らしい言い方やおばあさんらしい言い方もしっかり表現できていたと思います。4匹の小鯉魚たちの会話も字幕で見やすいよう工夫してあったと感じました (30代・女)
- ・とても面白くて、分かりやすかったです (30代)
- ・面白かった (80代)
- ・良かった (40代・女／50代)
- ・若い人向けならよいが、客層がしばられない時は慎重に (30代・男)
- ・少し違和感がある (50代・男)
- ・会話として短く (60代)
- ・やはり少し若すぎると思いました (40代・女)

### 6-3. 中国アニメ「三十六文字 (三十六個字)」について

今回、吹き替え版でお届けしましたが、これについてどう思われましたか。

- ・楽しく勉強になりました (30代)
- ・アイデアがすごいと思いました (30代・女)
- ・新しい試みでしょうか。吹き替えの声が良かったです (40代・女)
- ・良い試みで、今後もまたしてください (40代)
- ・日本の初等教育にも充分いける (30代・男)
- ・目が悪いのでありがたいです。右に中国語もあるので、中国語の学習にもよいのでは (60代・男)
- ・とても上手でびっくりしました。ストーリーも面白かったです (20代)
- ・吹き替えを担当された方の声がきれいで聞きやすかったです。中国語字幕も見ていて勉強になりました (20代・女)
- ・吹き替えがプロのナレーションのようで聞きやすかった。漢字の成り立ちの勉強にもなる (30代)
- ・吹き替えと思えないほどすんなり耳に入ってきた、とても上手でした。声が綺麗です (20代・女)

- ・皆上手です。恥ずかしがらずにはっきり聞こえました (70代・女)
- ・吹き替えと映画がピッタリでした (60代・男)
- ・上手に吹き替えられていましたが中国語の音声も聞きたかったです (70代)
- ・これも良いと思う (40代・女)
- ・語りがみな上手です (80代・男)
- ・上手かった (20代・女／60代)
- ・良かった (70代・男／50代)
- ・分かりやすかった (50代・女／50代・男／80代)
- ・面白かったです (20代・男)
- ・面白い、良い取り組みで良かったです。ためになりました (60代)
- ・父と子のやり取りが面白かったです (10代・男)
- ・父と子のやり取りのタイミングが違和感なく良かったです。作品中で子どもは「お父さん」と呼びかけているのに、家から出てきた女の人に「ママ」と言っていました。何か意味があるのですか (50代・女)
- ・吹き替え版は意味がない。あくまで中国語のセリフで、日本語と中国語の字幕を付けて欲しい (60代)

### 6-4. 中国映画「李さんスポーツ奮闘記 (大李、小李和老李)」について

#### ⑨ 作品はいかかでしたか

- ・日本で見る機会のない建国初期から文革前の映画を見られるこの企画を毎年楽しみにしています。楽しい映画でした (60代・男)
- ・作品のストーリーもスポーツを促進するもので非常に良かったです (30代)
- ・面白く、何度も笑わせてもらった (20代・男)
- ・明るい話でスッキリしてよかったです (10代・男)
- ・中国語の入るのもいいですね (70代・女)
- ・とても面白く、楽しく単語を聞きながら勉強させてもらいました (60代)
- ・面白い作品で時代が分かって良かった。翻訳も良かった (70代・女)
- ・謝晋監督の貴重な作品を見て良かったです。楽しかった (60代・男)
- ・古い上海の様子が新鮮で楽しかったです。お話もユーモラスで良かったです (20代・女)
- ・笑えるところが多く楽しんでみました (20代)
- ・大李と小李が老李に何とかスポーツに興味を持ってもらおうと、過程が面白かったです (20代・女)

- ・アニメーションもあってとても楽しかったです（20代・女）
- ・昭和の雰囲気が漂っていて逆の意味で新鮮（30代・男）
- ・わかりやすく、面白い題材でした（50代・女）
- ・とても面白かったです（30代）
- ・面白かったし、感動しました（30代・女）
- ・楽しかったです（40代・女）
- ・面白かった（40代・女／50代・女／50代・女／50代／70代）
- ・良かった（50代／60代）
- ・好！（70代・男）
- ・とても楽しい映画でした（60代・女）
- ・懐かしい（50代・男）
- ・面白そう。スケジュールの都合で充分観れず残念（60代）
- ・喜劇映画を通して中国人の生活を楽しく見ました（80代・男）
- ・作品が少し古い感じがした。以前、ジェット・リーが出演していた『海浄无堂』を見たが、これの字幕付けはどうかと思ったが、字幕がないのを選ぶのがいいのでしょうか（70代・男）

⑩ 字幕はいかがでしたか

- ・「絶賛説得中」抜群でした！！（50代・女）
- ・内容に引き込まれる字幕でした。「絶賛説得中」良い字幕でした（20代・女）
- ・分かりやすかったし、的確な言葉をチョイスしてあったと思いました（60代・女）
- ・約90分の映画を翻訳するのはとても大変な作業で時間もかかったと思います。お疲れ様でした。字幕も良かったです。不自然なところもなく心から楽しむことができました（30代）
- ・全て自然だったと思います。実際の言葉と字幕の違いなど気にかけることなく見てました（20代・女）
- ・物語に入っていけるシンプルで良いものでした（40代・女）
- ・違和感もなく分かりやすかった（20代・男）
- ・分かりやすく良いテンポと思いました（80代・男）
- ・分かりやすくて良かったです（10代・男／40代）
- ・分かりやすかった（20代／50代）
- ・とても見やすかったです（30代・女）
- ・とても良かったです（20代／30代／50代／50代・男）
- ・上手かったと思います（40代・女／70代）
- ・なかなか上手でした（60代）
- ・面白かった（70代・男）

- ・素晴らしいと思います（50代・男）
- ・翻訳も分かりやすく、字もはっきりしていた（70代・女）
- ・バッチリでした（60代・男）
- ・短く的確な言葉で分かりやすかったです（50代・女）
- ・好！（70代・男）
- ・good（60代）
- ・よくできていました（60代・男）
- ・日本語の字幕と併用して、中国語の字幕も付けて欲しい（60代）
- ・40代・50代のセリフがらしくなかったかも（30代・男）

6-5. その他、ご意見があればぜひお聞かせください。

- ・楽しい時間でした。勉強になりました。ありがとうございました（30代）
- ・今回の発表会に参加できてよかったです（30代・女）
- ・お疲れ様でした。ありがとうございました（60代・女）
- ・今回も楽しく見ました。学生の皆さん頑張って続けて下さい（70代・女）
- ・来年も頑張って下さい（50代・女／50代・男）
- ・また来年が楽しみです（60代）
- ・ロマンチック映画が良い（70代・女）
- ・また見に来ます（20代・女／30代・男）
- ・次回が楽しみです（70代）
- ・また来年も楽しみにしています！（20代）
- ・次回もまた来たいです。本日はありがとうございました（60代・男）
- ・楽しかったのでも来年も皆さん頑張ってください（20代・女）
- ・毎年楽しみにしています。来年見！（60代・男）
- ・会場の問題で、ちょっと前が見えにくかったです（40代・女）
- ・シナリオの販売をして、販売益を合宿代に組み入れてはどうかと思った（70代・男）
- ・よく頑張りました。全体に翻訳がスッキリしすぎのようになります。もう少し加えてもよかったのでは？（70代・男）
- ・今日来られた人は少なからず中国語に関心があるか、中国語を習っている人が多いのでは？それならやはり中国語のセリフ、中国語字幕を付けて欲しかった（60代）
- ・福大の支えは女子。健闘を祈る！！（60代）
- ・映画祭の協賛企画の会場のアジア美術館にもチラシを置くようにして欲しい。キャナルシティ



の映画祭会場にも分かる場所にはチラシがなかった。映画祭の常連参加者の2人もこの企画のことは全く知らなかった。福大のホームページにも載せて欲しい。今年は映画祭パンフから協賛企画が消えてしまった。復活するよう働きかけて欲しい(60代・男)

## 参考資料

- 一、第8回福大生による東アジア映画字幕制作成果発表会リーフレット
- 二、西日本新聞2017年9月22日記事

## 7. おわりに

今回の成果発表会も諸事情により中国映画のみのラインナップとなった。学科の現状を考えるとこの状況が当分続く可能性もあるが、さまざまな工夫と挑戦をしながら、できる限り続けていきたいと考えている。なぜなら社会に向けて目に見える形で学生たちの学びの成果を発信できる機会は、文系の学科にはあまりないからである。

今年も学科予算として会場費を学部から出していただいた。貴重な学部の予算を使わせていただいていることを肝に銘じて、今後も学生の積極性を喚起し、卒業生や学外の協力者とも協力してより一層努力を重ねていきたい。

なお、2016年は依頼がなかったが、今年は、アジアフォーカス・福岡国際映画祭から依頼を受け、香港映画「毒のいましめ(毒。誠)」(劉国昌／ローレンス・ラウ監督、2017年)の字幕翻訳を本学科教員2名と卒業生3名が担当した。これは広東語の台詞の翻訳というこれまでになかった経験であった。幸い広東語ネイティブの方にもよくできていたとお褒めの言葉をいただいたので、なんとか務めは果たせたのではないかと考えている。作品は2017年9月19日の福岡観客賞授賞式の際、キャナルシティ博多13で上映された。



第9回  
福大生による  
東アジア映画  
字幕制作成果発表会

## 李さんスポーツ奮闘記

《大李、小李和老李》 1962

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2017協賛企画

2017年9月23日(土)13:30～15:45(開場13:00)

福岡天神 エルガーラホール7階 多目的ホール

主催○福岡大学人文学部東アジア地域言語学科

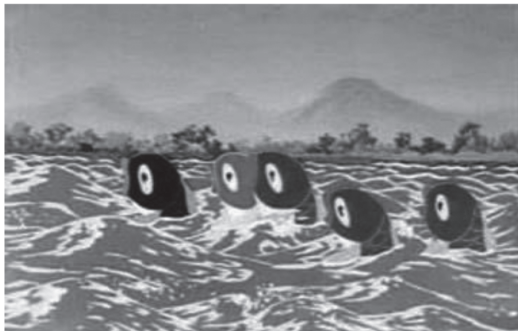
問い合わせ○092-871-6631(内線4372) ○<https://www.facebook.com/fula1999>

協力○福岡大学工学研究科資源循環・環境工学専攻

後援○福岡市、福岡市教育委員会、アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会

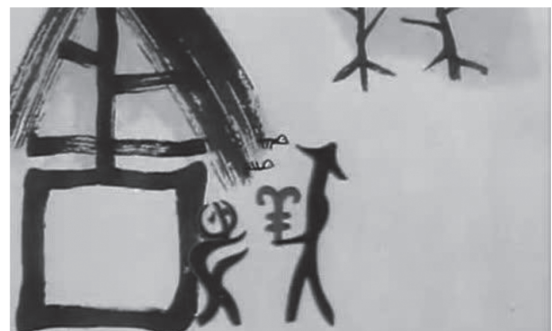
※上映はプロジェクター投影です。

※入場無料・事前申し込み不要



## 龍門を跳び越えろ

《小鲤鱼跳龙门》 1958



## 三十六文字

《三十六个字》 1984

## 謝晋の映画について

間 ふさ子

今回私たちが日本語字幕をつけて上映する作品「大李、小李和老李（李さんスポーツ奮闘記）」は、中国の著名な映画監督・謝晋（Xiè Jin、1923-2008）が 1962 年に監督したものだ。50 代以上の中国映画ファンなら、謝晋が監督した『芙蓉鎮』(86) が日本でも大ヒットしたことを覚えておられるだろう。

謝晋は 1948 年に映画界に身を投じ死の直前まで 60 年もの長い映画人生を送った。彼の映画活動の際立った特徴は、激動の 20 世紀後半の中国において、コンスタントに映画を作り続けられたことである。これはある意味奇跡的とも言える。この小文ではその特徴を、彼の監督作品を順に追いながら確認してみたい。

### 一、文革まで (1953-1966)

謝晋は 1953 年に上海電影制片廠で監督に抜擢された。1953 年といえば中華人民共和国が成立してまだ 4 年目。謝晋は戦争中は国民党が統治する地域（国統区）にいたため、共産党との接点は全くなく、解放区での革命経験もない。つまり政治的には非エリートだった。にも拘わらず、中華人民共和国において 30 歳の若さで監督になれたのは、おそらく彼が映画人として卓越した能力や技術を持っていたからであろう。

この年、謝晋は石揮監督の「鶏毛信」で助監督を務めた。これは

抗日戦争をテーマとした児童映画で、大ヒットとなった。石揮は名優としても知られ、自ら監督・主演・脚色した「我這一輩子（私の一生）」という傑作がある（原作は老舍）が、1957 年の反右派運動で批判され、自ら命を絶った。当時映画は映像と音声で人民に直接影響を与えることのできる唯一のメディアであり、中国で映画を作るのは、政治運動の嵐に巻き込まれる危険と隣り合わせでもあった。

謝晋は 1956 年に独り立ちして「女籃 5 号」という作品を発表する。この年は、毛沢東が「百花齊放、百家争鳴」という文芸方針を唱え、文芸創作が活発化した年だが、周知のごとくこれは前述の反右派運動という知識人弾圧につながっていく。

この作品は女子バスケを扱ったスポーツものだが、その当時映画の主人公といえば戦士か労働者だったのに、この映画は知識人を主人公としたメロドラマで、のちの謝晋作品の特色となる、時代や政治の波に翻弄される個人の苦難とその内面が描かれていた。

続いて彼は、1960 年に「紅色娘子軍」という映画を撮る。「紅色娘子軍」というのは海南島で組織された女性ばかりの共産党の軍隊の別称だ。作家の梁信が彼女たちをモチーフとして脚本を書き、それを気に入った謝晋が映画化した。

「紅色娘子軍」は、文革期に「革命模範劇」としてバレエや現代京劇になり、日本ではこちらのほうが印象が強いが、謝晋の映画はこ

れらとは全く異なる、人間味あふれる作品で、メロドラマの名手である謝晋の手腕が余すところなく発揮されている。

謝晋は、当時上海戲劇学院の学生だった祝希娟をヒロインの呉瓊花に抜擢した。彼女が憧れる共産党員・洪常青は当時の二枚目・王心剛が演じている。ヒロインの南方的な風貌と情熱的な眼差し、そして敵に捕えられ従容と義につく洪常青の格好良さが、当時の中国の観客の心を奪った。ただ謝晋はこれをラブストーリーとして描いたのだが、二人が愛を言い交す場面が上部のチェックにひっかかりカットされてしまった。それを謝晋はずっと悔やんでいたようである。誤解を恐れずに言えば、謝晋の「紅色娘子軍」はヒロインの成長物語であり、一種のアイドル映画だった。

「紅色娘子軍」の次に謝晋が作ったのが、今回上映する「大李、小李和老李」(62) で、そのあと、彼は入念に準備して 1964 年に「舞台姐妹（舞台姉妹）」の撮影に入る。

この作品は、二十世紀前半の江南を舞台に、越劇（上海の地方劇、女性が男役を演じる）の旅回りの一座に命を救われた貧しい少女が、河原乞食とさげすまれながらも、演劇を通して社会変革の道を志していく姿を描いている。「紅色娘子軍」と同様、虐げられた女性が覚醒し成長していく物語だが、前者に比べて構成や人物の描き方が複雑になっており、謝晋の監督としての成長が感じられる。ところが、



撮影が三分の二ほど進んだところで、当時の文芸界における政治権力闘争に巻き込まれてしまう。二年後に文革が始まると、北京電影制片廠の「早春二月」(64)とともに「二大毒草」というレッテルを張られて大批判の嵐にさらされる。興味深いのは、当時この作品を批判するため上海のある造船所で上映したところ、見ていた女性労働者たちがみな感動して泣いてしまったという話が伝えられていることだ。この作品がヒロインと同じような境遇を経てきた女性たちの共感を呼んだことがよく分かるエピソードである。

## 二、文革期 (1966-1976)

文革中は謝晋本人も繰り返し批判され、労働改造に送られて映画を撮ることができなくなった。

ところが、ある時、謝晋は突然上海に戻って映画を作るよう命じられる。当時制作されていた映画の出来が思わしくないため、彼にテコ入れさせようというわけだ。その結果、彼は「海港」(73、革命現代京劇)、「春苗」(74)、「磐石湾」(75、革命現代京劇)という、文革期に作られ、のちに批判されることになる映画にも「監督」として名前が残ることになった。とくに「春苗」は、一人の少女がいわゆる「裸足の医者」として成長していく物語で、謝晋得意の題材ではあったものの、「雇われ監督」に過ぎない謝晋が「大プロデューサー」である江青の意向から自由であることは不可能であった。とはいえ、当時、著名な映画人はほと

んど強制労働に従事させられていたのであるから、文革期に映画を三本も監督した謝晋は、やはり例外的な存在だったと言える。

## 三、文革後 (1977-2000)

謝晋は文革終息後、1980年に「天雲山伝奇」、1981年に「牧馬人」を発表する。この二作は、のちの「芙蓉鎮」(86)と共に「反思三部作」と呼ばれ、反右派運動や文革で迫害された人々の境遇を描いて論議を呼んだが、いずれも「舞台姐妹」に連なる作劇法で、当時の中国の観客の心を大きく打った。

1980～90年代にかけて彼が撮ったのは、日本留学経験のある清朝末期の女性革命家を描いた「秋瑾」(83)、1984年に起こった中越国境紛争を題材とした「高山下的花環（戦場に捧げる花）」(84)、台湾の著名作家・白先勇の原作の映画化で台湾出身の女優・林青霞の主演起用を目論んだ「最後の貴族（最後の貴族）」(88)、日本人残留孤児の運命を描いた「清涼寺鐘声（乳泉村の子）」(91)、香港返還の年に撮った「鴉片戦争（阿片戦争）」(97)など、その時代の「風」を捉えた作品ばかりである。

この「時代の風を捉える」ことこそが謝晋映画の最も大きな特徴ではないかと筆者は考える。

## 四、「毒草」たち

中国謝晋の60年の映画人生は中華人民共和国の激動の時代とまったく重なっている。彼が監督した作品は29本（共同監督含む）にのぼり、しかも如何なる政治の季節においてもコンスタントに映画

を作り続けた。

その結果、文革前に作られた映画は文革期に「毒草」として批判され、文革期に作られた映画は文革後批判の対象となって長らく封印されていた。文革後に作られた映画も、上映後政治の風向きが変わって批判を受けたり封印されたりした作品が少なくない。

「時代の風」を取り込んで作られた映画は、風向きが変われば批判されるのは当然で、謝晋はそれを繰り返していたことになる。ところが彼はそれでも映画界から消えることなく60年の長きにわたって映画を撮り続けることができた。おそらくそれは、彼が時流を見る目を持っていたと同時に、同時代の観客の心を捉える映画の作り方を知っていたからであろう。苦境に立つ人々の奮闘を描く波乱万丈の物語、それは、激動の時代を生きてきた中国の観客が容易に自分を投影できるものであった。

意地の悪い言い方をすれば彼の作風は観客に媚びていると言えなくもない。だが、語るべき物語を中国人の誰もが持っていた二十世紀後半に謝晋という作家が活躍したのは、むしろ時代の必然であったのではないだろうか。

(福岡大学人文学部東アジア地域言語学科)



謝晋

## 1962 年、父と息子の関係から

甲斐 勝二

1962 年と言えば、1958 年以來の大躍進運動の失敗により中国各地で相当規模の飢餓を引き起こされていた時期である。餓死するものも多く、山東出身の中国人の友人もこの折危うく「間引き」されるところだったと聞く。しかしながら、どうやら上海付近ではまだ余裕があったようだ。食肉加工工場に運び込まれる豚の様子や加工場に吊り下げられる豚肉の有様、工場内での昼食の賑わいは、都市と郊外農村との順調な関係を示し、決して飢饉の事情は見えてこない。それは同じ時期の作品で昨年この上映会で扱った「女理髪師（奥様は理髪師）」の上海での会食場面などを見ても同様である。街の食堂でのまことにおいしそうな会食のシーンが出ていた。その上「スポーツ振興」という新しい厚生活動を会社に取り入れる提唱の余裕もある。これは上海の背後に広がる江南の豊かさのおかげだろうか。或いは、映画は映画で希望を語り、現状は現状で対策を急ぐものだったのだろうか。

もし、映画が当時の希望だったとしても、それはもちろん空腹を満たすことだけにあったのではないだろう。この時期は 1948 年に共和国が建国され、新しい国作りが始って一定の時間が過ぎ、生活面では若者の考え方と父親世代の

考え方の違いが明らかになってくる時期でもある。上層の政治運営のレベルとはまた別に日常の生活にもそれはあったはずだ。この映画は日常における若者世代と父親世代の融和への希望が人々の健康を促進する「体育」あるいは「スポーツ」というものの導入という視点から描かれているように思われる。以下それについて書いてみたい。

登場する三人の李姓の人物は、何事も会議を開いて決めようとする仕事熱心な老李 48 歳、その息子で老李の部下に当たる 20 代前半の小李、そしてその会社の体育協会長に選ばれた大李で、おそらく 30 代である。老李と小李は父子家庭の親子のようで、父親の老李は息子の小李のスポーツ好きを認めながらも、その「スポーツ」を仕事には縁のないものと捉え、自分の青年時代の事を挙げて息子に生産活動に打ち込むよう説教をする。老李は工場主任として運動する時間よりも班長会議を開く時間の方が重要だと考えるのである。小李の方は皆に体操を勧めながらも、自分の楽しみの「スポーツ」の必要性を理論化して父親を説得できるわけではない。レスリングの選抜選手である喜びから皆に体育を勧めているくらいにしか見えない。ただし、登場する医者スポーツの健康保持への価値に気づいているし、その効能は大李が体操を続けることで持病の腰痛が消えたこと、また労働者たちも娯楽が増え、新たな生きがいもまたそこに生ま

れそうなことは、物語の流れの中でちゃんと示されている。「スポーツ」の持つ効果やその意味を健康増進による生産活動の促進の映画として露骨に描いていないところが、映画製作の工夫であろう。映画に出てくる各種の模範演技や競技の様子などはなかなか見事だ。

ところで、小李が父親の老李にうまく説得できないのは、小李に理論が欠けるばかりではない。どうやらそれは理容師が「親は絶対だ（だから主任と衝突しかねない体育委員長に小李はなるべきではない）」と述べるような倫理観の中にいたからでもある。したがって、小李は父との正面からの衝突をさけ、父からの信頼厚い大李を仲間に引き入れ体育委員長にすることでうまく会社でのスポーツ振興を果たそうとする。大李はラジオ体操も知らない運動音痴であったが、そのようなものが体育委員長になれば活動も静まらだろうと考えた老李の思惑もあり、大李は思いがけず委員長となる。誠実な大李は体育協会の長として職責を果たす事に努めて、二人の間に立ち父親の説得に尽くし始める。時には短気を起こしがちな小李に「まあ我慢しよう」「分かってやろう」といいながらじつくりと父親の説得を目指す。頑固な父親の気持ちを理解すべきことを息子の小李に勧めるところは、なかなかの人物ぶりである。二人の会話を聞いた老李は、やがて意地を張るのを止め、最後には自らも太極拳を始め、「スポーツ」というものが会社の中で

位置づけられていく。

スポーツの持つ健康への効用やその必要性によって老李が説得されるのではなく、心情の理解によって問題が解決されることや、このような解決のための忍耐を上立つ親ではなく子供の側に求めているところが面白い。それはおそらく革命から15年近く経た当時の状況から生まれたものだろうと思うからだ。

新しい社会思想で育てられた世代が、既に古くなった上の世代の考え方と対峙するとき、そこに何らかの衝突が起こるのは当然だ。その時、道理や効果を主とした直接対決から勝負を進めるのではなく、既に先に進んでいる子供の側から、従来の倫理観を踏まえつつ、過去の思想を代表する父親を我慢と理解で粘り強く納得させようとして行くこと、それが当時要請されていた行為として日常の中にあっただけではなかったか。だとすると、世代の対立をこのような形で解決して見せたこと、それは親側に立つ人も子供側に立つ人にもともに其の行動を考えさせるものとなったと思われる。やがて迎える文革ではこれがどうなっていくのだろうか。

（福岡大学人文学部東アジア地域言語学科）



## 字幕付け作業について

種村 理恵

第4回の「我們村裡的年輕人（村の若者たち）」から字幕制作に参加させていただき、今回で6回目の参加となりました。

今回、「大李、小李和老李（李さんスポーツ奮闘記）」の字幕制作に参加させていただいたのはもちろんのことですが、短編アニメーション「小鯉魚跳龍門（龍門を跳び越えろ）」にも字幕付けをしました。この作品は、2年生が授業で短縮版の作品に字幕を付けており、残りの字幕がついていない部分に初参加の1年生が挑戦しています。私は1年生に手順や直訳を説明しながら、字幕付けのお手伝いをさせていただきました。

「小鯉魚跳龍門（龍門を跳び越えろ）」に限らず、字幕を付けていく過程として、まず、セリフの意味を正確に読み取る必要があります。そのうえで、セリフの長さに対する文字数（1秒4文字）で字幕を考えていかなければなりません。意味を理解し、字幕を付けることも語学学習にはなりますが、中国語の勉強を始めて間もない1年生にとって、中国語のセリフが少しでも聞き取れるようになることも学習の1つだと思います。初めて作品を観たときはほとんど聞き取れなかったセリフでも、意味を文字で確認し、その後何度も聞くことでセリフが聞けるようになり、「听力（聞く力）」も伸びてい

くと考えられます。また、それをデータ化し、学習効果を計ることで、語学教育の可能性を探ることもできると思います。

字幕付け作業は「听力」以外にも、やり方次第で語学力を伸ばすことができ、授業にも生かせるでしょう。しかし、それには先生方がこれまで2年生の正課でも苦労されてきたように、指導側の工夫も必要で、今後更なる検討価値があるのではないかと、今回1年生と一緒にやってみて思いました。

このように字幕付け作業を行う中で、見えてくるもの、考えられることがいろいろあります。語学学習以外にも字幕付けすることによってわかるであろうことをいくつか述べてみたいと思います。

今回の「小鯉魚跳龍門（龍門を跳び越えろ）」では、あえて口語的に字幕を仕上げました。普通に字幕を付けた場合とかなり字幕の印象が違うのではないのでしょうか。同じ映画でも、字幕を付ける人によって作風は変わってくると思います。それは、人それぞれ映画の捉え方が多少違い、作品に影響してくるからです。原作の意図を読み取ることは大事ですが、長いセリフがあった場合、とても全部を字幕に生かすことができません。その場合、そのセリフの中で一番大事だと思われる部分を字幕にして表現しますが、こういうところで字幕による多少のオリジナリティーが生まれるのも面白さにつながってくるかもしれません。

また、今回は「三十六個字（三



十六文字)」において、吹き替えにも挑戦していますが、字幕と吹き替えにおいても伝わる情報量の違いが随分出てくると考えられます。吹き替えの場合は、文字よりも伝えられることが多いと言われていきます。同じ映像において字幕と吹き替えの2つを比べてみれば、どのぐらいの違いがあるのか見えてくるでしょう。

他にも、字幕を入れるには、スポッティング（セリフを言っている間の字幕を入れるハコを作ること）をすることになりますが、そのスポッティングをするタイミングも字幕を作る側によって変わることでしょう。その違いも比べられるのではないのでしょうか。私たちもこれまで字幕付けを行う中で、最初のスポッティングでは短めにセリフを区切っている、字幕を考える途中で結合する場合もあれば、逆に長めのセリフを分割する場合もあります。このように字幕の区切られ方により、映画の印象がどう変わるのかということも考えてみると面白いと思います。

実は今回、アジアフォーカス福岡国際映画祭の福岡観客賞授賞式の際に上映された「毒。誠（どくのいましめ）」にも字幕付けをさせていただきました。この映画は香港映画でセリフは全て広東語だったため、私は正直全く聞き取れず、文字データに頼ることしかできませんでした。しかも、映画の内容に時代の前後もあり、背景も難しく、とても苦労しました。その中で、私が改めて字幕付けにおいて

興味を持ったのは、呼称表現をどうするかということです。「毒。誠（どくのいましめ）」では、主人公をはじめ、登場人物にニックネームが付けられていました。カタカタの長い名前になると、制限がある文字数を使いすぎてしまいます。また、名前の響きがよくても字面が悪いという問題もありました。人の名前をどう呼ぶかというのは結構苦労するものです。

これまでの作品、「錦上添花」、「花好月圓」等でもニックネームが付けられていました。特に「花好月圓」では、登場人物が多いのに、ほとんどがニックネームでよばれていて、字幕をどうするか悩んだのを覚えています。

呼称表現と言え、自分自身の呼び方もその一つです。「私」だったり、「俺」、「僕」、「わし」等、表現はさまざまです。中国語では「我」のみですが、日本語字幕にする場合にはどうしても「私」に統一するには不自然だと思います。人物関係及び内容によって変えなければなりません。いろいろな作品でどのように呼称表現されているかにも注目してみたいものです。

字幕付け作業をとおして、さまざまなことが考えられ、字幕への興味は増すばかりです。今後も何らかの形で関わっていければ、幸いです。

今回も貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございます。間先生、甲斐先生にこの場を借りて感謝申し上げます。

（九州大学大学院地球社会統合科学府院生）

## 私の感想

房 瑞麗

翻訳・中願寺桃佳

私は房瑞麗と申します。中国計量大学から来た教員です。幸運なことに今回福岡大学を訪れ半年間研究する機会に恵まれました。さらに幸運なことに、福大にきた翌日、折良く甲斐先生と間先生が率いる東アジア地域言語学科の学生とたちが高原にある研修所で映画の字幕学習推敲会をすることになっており、それに参加することができました。私は日本語ができず、直接参加して討論と学習をするすべがなくとても残念でしたが、先生と学生たちの細かく真剣な様を目にして、大変感慨を催しました。映画の中のセリフひとつひとつについでできる限り短い時間に最も簡潔な日本語を用い、最も精度の高い翻訳を示すことを求めるのは実に大変なことです。中国語の意味はとても豊富で、映画の中ではなおさらです。しばしば表現されるものが字面の意味より大きくなってしまいます。このような時は数種類の日本語の翻訳が可能です。先生と学生は繰り返し討論し、推敲し、最後には最もよくできた翻訳を字幕とします。学生たちは、このような訓練を経て、聞く力を訓練するだけではなく中日文の翻訳の専門知識を学び修めます。加えて先生がたの勤勉さと責任感を感じることができました。学生が直接討論と実践に参加するこ

った方法や先生方の心構えは、私が学ぶに値する意義があると思いました。

今回選ばれた映画は中国の有名な監督である謝晋が 1962 年に撮影した『大李、小李和老李』です。実を言えば、この映画は 70 年代生まれの私にとっても古い作品であって、今回初めて鑑賞しました。映画には工場でスポーツを普及させようとしていた当時の事情が反映されています。小李と老李は親子で、一方は積極的にスポーツに参加し普及させている青年、一方は頑なに反対し排斥運動をする工場の主任です。大李という人は彼ら親子の間の潤滑剤で、老李の思想の転化の鍵になる人物です。映画では、「气象台」とあだ名される大李が、長年天気が悪い日は腰が痛んでいたのに、最後にはスポーツのトレーニングを通じて「气象台」のレッテルを取り除くことができ、前後が見事に呼应し、スポーツが人の体と心に変化をもたらすことを暗示しています。あの時代、人々は自分の感情を表すのにまだまだ控えめで、作中描かれる小李と描雲のカップルの愛情もしばしばまなざしや微笑みを交わすことで伝えられていました。鑑賞後、爽やかな風が真正面から吹いて来たようで、様々な思いが浮かんできました。

（中国計量大学）

## 我的感想

房 瑞丽

我叫房瑞丽，是一名来自中国计量大学的老师。很幸运这次有机会来福冈大学进行为期半年的交流访学，更幸运的是来福大的第二天，就赶上了甲斐老师和间老师带领东亚地域语言学科的学生，来福大高山研修所进行电影字幕学习推敲会。虽然我不会日语，非常遗憾无法直接参加讨论和学习，但看到老师和同学们的细致与认真，还是有颇多感慨的。对于影片中的每一句台词，都要求在尽可能短的时间内，用最简洁的日语语言，进行最准确的表达翻译，实为不易。因为汉语意蕴比较丰富，特别是在电影中，往往所要表达的意思大于字面意思，这时候可能就会有几种日语的翻译方法，老师和同学们就一遍一遍讨论，一次一次推敲，最终选定一种最佳翻译语言作为字幕。学生们经过这样的锻炼，不仅锻炼了听力，学到了中日文翻译的专业知识，我想更加能够感受到老师敬业和负责的精神。这种让学生直接参与讨论和实践的方法和老师们精神，也是值得我学习的。

这次所选择的电影是中国著名的导演谢晋先生在 1962 年拍摄的一部影片——《大李、小李和老李》。说实话，这部电影对于作为 70 后的我来说，也算是年代久远了，所以我也是第一次观看。影片反映了当时在工厂推广体育运动的事情，小李和老李是一对父子，一个是积极参加和推广体育锻炼的青年，一个

是坚决反对和排斥运动的车间主任。而大李这一人物则是他们父子之间的催化剂，也是老李思想转化的关键人物。影片由被称为“气象台”的大李多年以来一到阴雨天就腰酸痛开始，到最后则是通过体育锻炼摘掉了“气象台”的帽子，首尾呼应，暗含了体育运动给人的身体和心理带来的变化。那一时代，人们在表达情感方面还是比较含蓄的，影片中穿插的小李和描云一对恋人的情谊，往往是通过一个眼神和莞尔一笑传达的。观后，似有一股清爽之风迎面而来，令人遐想。

（中国計量大学）



## 1960 年代の国有企業の労働者の暮らしの特色

今村 紀秋

### 国有企業とは？

1960 年代では、民間企業や外資系企業が認められず、企業といえば、国有企業と集団企業(企業の資産が公民集団所有に属する企業)しかなかった。また、国有企業は国民経済の中で主導的な役割を担っているため、国有企業の運営に関しては、政府部門が生産・投資・販売などのあらゆる意思決定を集中し、国営企業はその決定を実行する行政機関に過ぎなかった。国有企業は工業分野の生産額が 80%~90%を占めるなど、当時国民経済の各分野で圧倒的な地位を占めていた。

### 国有企業の労働者の生活

国営企業は、生産活動のほかに、福利(労働者の住宅や病院の経営など)、社会保障福祉(退職後の労働者の生活費や医療費を本人が亡くなるまで支給するなど)、子供の教育、町の治安や衛生などさまざまな機能を持っていた。また、食堂、浴場、幼稚園、商店、理髪店、学校、病院、映画館など様々なサービス業が従業員とその家族に提供された。映画や劇場などは、職場から切符が配給され、見る事が出来た。一般の人々はなかなか見られない映画・劇場を見るということは、国有企業の労働者にとって誇りであったに違いない。従業員は一旦国有企業に就職すると、生・老・病・死といった生活のあらゆる側面に渡って企業が全面的に面倒を見るため、国営企業と従業員との間には、企業が従業員に対して全責任を持つ反面、従業員が生活を完全に企業に依存するという一種の特殊な依存関係が形成されていた。

### 国有企業の問題点

国有企業の問題点は、運営結果の責任の所在が不明確な点が挙げられる。その結果、たとえ国有企業の支出が継続的に収入より大きくとも、結局のところ国家補助金で埋め合わされる態勢となった。

### 「大李、小李和老李（李さんスポーツ奮闘記）」で注目してほしいところ

本日お見せする「大李、小李和老李」という映画の舞台は、国営企業である上海の肉類加工工場が舞台となっています。メインストーリーは「スポーツ」ですが、国営企業の労働者の生活ぶりにも是非注目して見てみて欲しいと思います。



### 参考文献

- 天児慧ほか編『岩波現代中国事典』岩波書店 1999 年  
倉沢進・李国慶『北京 皇都の歴史と空間』中公新書 2007 年  
孫根志華「中国国有企業の改革(1980~2010 年)」『城西国際大学紀要』25(2)、2017 年



中国のラジオ体操の始まりは1951年11月4日に中華全国体育総会準備委員会と中央公播局が共同でラジオ体操番組の放送を決定したことからである。

劇中に登場する少年ラジオ体操も同年に誕生した。少年ラジオ体操は中国の小中学生が最初習うラジオ体操であり、脚の運動、両手両足の運動、胸部の運動、体を横に曲げる運動、ひねりを加える運動、体を前後に曲げる運動、バランスをとる運動、跳躍運動、調整運動、深呼吸の運動、と全部で10節の動作から成る。

一方日本では、1928年に通信省簡易保険局（現在のかんぽ生命）がアメリカの健康体操をもとに、日本人の体格向上のため国民すべてが行うべき運動として「国民保険体操」を制定したことにより始まった。

中国では1960年に3種の行員ラジオ体操が公布された。第1工員ラジオ体操は紡績工員、第2工員ラジオ体操は鉄工員、第3工員ラジオ体操は炭鉱の鉱夫を対象としている。これらは疲労回復と生産の向上を目的として公布された。その後、これらをもとにして作られた第4ラジオ体操はこれらの体操より変化が多く、運動量も増えた。これらは大衆の文化生活の活躍を拡大にして体育活動の内容を豊富にし、人民の体質を増強するためである。

2011年には第9ラジオ体操が公布され、さらに健康に良い影響を与えた。

一方日本では終戦の頃、ラジオ体操が軍国主義的であると連合軍総司令部から指摘され、1946年に放送が中止された。しかし国民のスポーツに対する関心が高まったため、1951年現在のラジオ体操が誕生し、1953年には夏休みのラジオ体操が開始した。

中国ではラジオ体操は今回の映画からもわかるように、多くの退職者や女性は早朝に公園でラジオ体操を行うことが多く、機関や工場、学校では午前10時前後に行われていて、国民の生活にラジオ体操が身近なものとなっている。しかし、日本では小学生が夏休みや運動会の時などに行っているが、日常的な運動としてラジオ体操を取り入れている中国と比べると、国民全体がラジオ体操を日頃から行っているとはいえないのだ。

#### 参考文献

##### ●中国のラジオ体操

百度文庫 广播体操 <https://wk.baidu.com/view/97a704fac8d376eeaeaa319f?pcf=2#1>

岩波現代中国辞典 ラジオ体操

中国の体育・スポーツに関する法令・条例

[http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php/AN00135710-00140001-0011.pdf?file\\_id=61998](http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php/AN00135710-00140001-0011.pdf?file_id=61998)

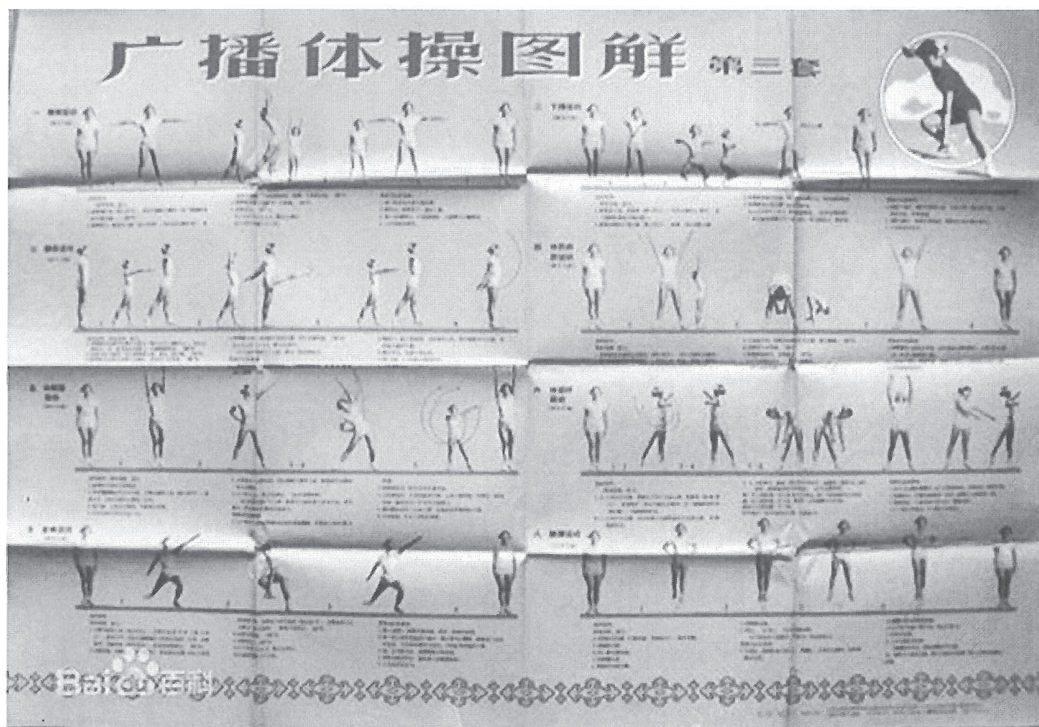
##### ●日本のラジオ体操

[http://www.rajio-taiso.jp/taisou/shiryoku/h16\\_research\\_01.html](http://www.rajio-taiso.jp/taisou/shiryoku/h16_research_01.html)

かんぽ生命

[http://www.jp-life.japanpost.jp/aboutus/csr/radio/abt\\_csr\\_rdo\\_history.html](http://www.jp-life.japanpost.jp/aboutus/csr/radio/abt_csr_rdo_history.html)

太田梨沙・清瀬彩喜・満永みなみ・山田実奈・増永奈央・田口祐希



1

## 中国人的数字手势

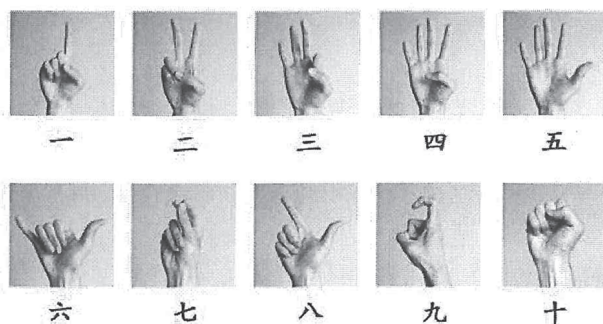
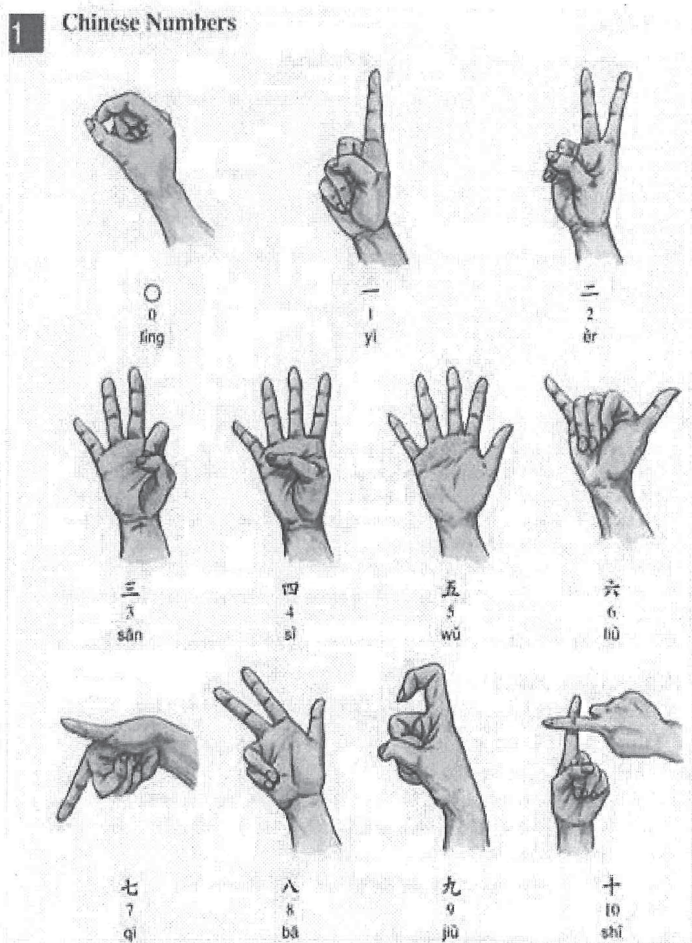


図 2

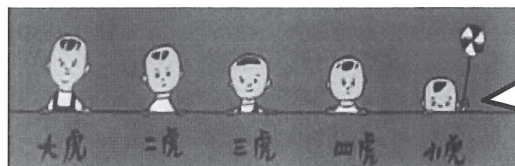


「大李、小李和老李（李さんスポーツ奮闘記）」には、「数」が非常にたくさん出てきます。ラジオ体操の掛け声や、老李の年齢、大李の奥さん・秀梅の作った記録など、中国語初級のリスニングにはもってこいかもしれません。

とくに、登場人物が何度か指数を示すシーンがありますが、お気づきになりましたか？中国の指による数の表し方（“数字手势”）はとてもユニークで、片方の手で一から十までの数字を表すことができます。この方法は、古代中国の商業活動ですでに広く使われていたそうです。なぜこれが発達したかという、方言による誤解を避けるためだとか。確かに“一 yī”と“七 qī”、“四 sì”と“十 shí”など、誤解を生みそうな発音がありますね。図1が中国の一般的な“数字手势”ですが、南方ではやや異なっていて、図2のようになるそうです。

画像引用：<http://news.jnnc.com/ent/2017/0802/576866.shtml>





上映前に要チェック！  
『大李、小李和老李(李さんスポーツ奮闘記)』  
人物相関図

作成：花田優香



描雲  
小李の恋人。葉塘鎮出身。



おさげの書店員  
大李にラジオ体操を教えた。



秀梅  
大李の妻。5人の息子のお母さん。

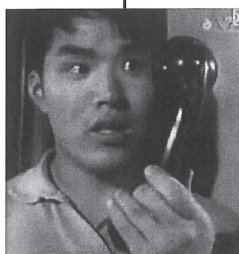


三虎

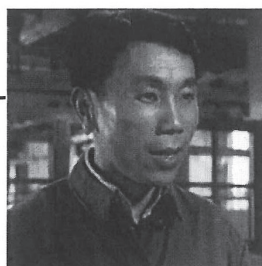


小虎

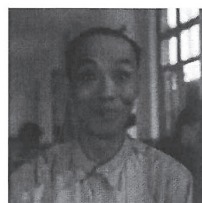
大李の息子たち



小李  
老李の息子。スポーツが大好きで、工場内でのスポーツ活動の振興に奔走する。



大李  
あだ名は「气象台」。腰痛持ちで運動音痴であるが、体育主席をやることになった。



理容師  
積極的にスポーツ活動に参加する。  
大李と小李に協力的。

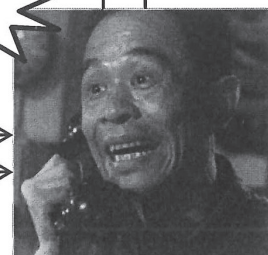
食肉加工工場の人々

スポーツなんぞくだらん！

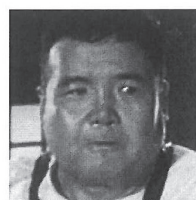
衝突

スポーツをさせたい！

親子



老李  
小李の父。食肉加工工場の主任。息子の行動に理解がない頑固おやじ。



大力士  
老李の部下。体は大きいですがスポーツに興味がない。



王医師  
工場内勤務のお医者さん。積極的にスポーツ活動に参加する。

# 字幕メンバー紹介♡



## 花田 優香 (4年)



1年生の時に初めて字幕制作合宿に参加させていただいてから、早くも3年が経ってしまいました。3年の間に携わった作品の中でも特に思い出深い作品は、一昨年の成果発表会で上映した『花好月圓(花はよし月はまるし)』です。この作品は登場人物が多く、また描かれている時代がとても複雑であったため、字幕制作にとてつもない時間と労力がかかりました。しかし大変であった分、成果発表会を終えた時は達成感と感動が大きかったことも今でも鮮明に覚えています。

字幕制作成果発表会は今年で9回目を迎えましたが、今後も20回、30回と続いていって欲しいなと切に思います。私自身、この字幕勉強会の活動があったからこそ大学に入学してから今まで、中国語を楽しく学ぶことができてきたのだと感じています。何を「楽しい」と感じるかは人それぞれですが、どんなことでも楽しいと思うことが習得の近道であるのではないかと思います。字幕勉強会に参加するたびに、「次はもっと自分の意見を言えるよう頑張りたい」と意気込んで取り組んできました。その思いをより一層強く持って取り組んだ今年の上映作品、『大李、小李和老李(李さんスポーツ奮闘記)』は自身が携わることのできる最後の作品ということで、これまで以上に思い入れのあるものとな

りました。

最後になりましたが、間先生、甲斐先生、徐さん、雷さん、房老師、OGの先輩方、1~4年生の皆さんと共に字幕制作に携わることができたこと、そして本日無事に皆様に字幕作品をお届け出来たことをとても嬉しく思います。字幕制作メンバー渾身の字幕で、作品を楽しんでいただけたら幸いです。

## 中願寺 桃佳 (4年)

私は字幕勉強会への参加は今年で2回目です。今年の勉強会は去年にも増して有意義なものとなりました。今回初の試みとして中国語アニメーションの吹き替えを行いました。そこで私は男の子の声の吹き替えを担当する機会に恵まれました。吹き替えというのはとても難しく、字幕制作の際と同じように文字数に注意して訳をしなければ声が時間内に収まらなくなるので気をつけなければなりません。「三十六文字」では普段映画の吹き替えで見かけるような口の動きに合わせて話すということがなかったにもかかわらず、映像に合わせてセリフを言うことはとても難しく感じました。そして同時に吹き替えを行なう声優の大変さを理解することができました。

また今年の合宿では1年生の参加がとても多く、そして2年生がよく意見を出していてとても賑やかな合宿となりました。最後に、間先生、甲斐先生、OGの先輩方や留学生の方々、1~4年生の字幕メンバーと共に今回の字幕制作に携われたことを幸運に思い、感謝の意を表したいと思います。





## 今村 紀秋(4年)

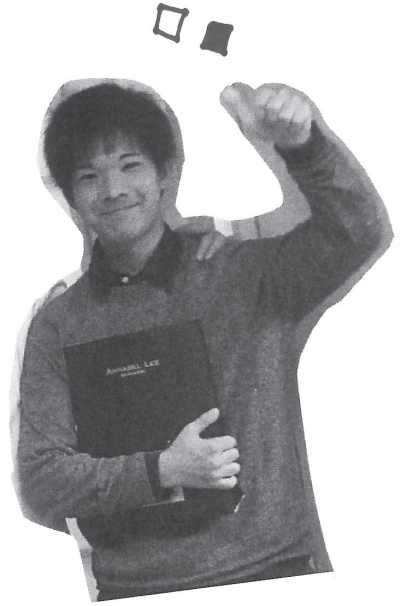
4年生になり、中国映画字幕研究会に参加するのも今年で最後になりました。最後になるのは寂しくもありますが、今は大きな達成感を感じています。

参加したころを振り返って見ると、初めて参加した2年生の時は、中国語を聞いても、内容をまったく理解することが出来ず、何の貢献も出来なかったのをよく覚えています。

そして、三年次に上海へ1年間の交換留学を経験し、満を持して参加した今回ですが、何とか少しは貢献できたかなと思いつつ、改めて字幕をつけることの難しさを実感しました。

恒例行事となっている夏合宿では、4年生は3人と少なかったですが、多くの1年生が参加をしてくれたので大いに盛り上がりました。個人的には、3人の男子生徒が参加してくれたので、男子独りぼっちになることなく(一回目に参加したときは男子ボッチでした)、存分に楽しむことが出来ました。

最後になりましたが、これまで中国字幕研究会で活動をしていく中で様々な経験をさせてくださった間先生、甲斐先生に感謝申し上げますとともに、OGの先輩方、留学生の方々、1~4年生のみんなと字幕製作に携わることができたこと、そして本日お客様に無事作品をお見せできることをとてもうれしく思います。



## 小串 六美 (4年)

初アフレコ！初上海留学！

今回初めて字幕会に参加させて頂きました。今まで何度も字幕つきの映画を見ましたが、外国語を訳しながら且つコンパクトに伝えたいことをまとめる大変さを知ることが出来ました。そして何度もセリフを聴きないうちに、役者さんの声の表現や細かな表情もじっくり見ることができ、映画界の面白さも実感しました。次の目標は中国のコメディ番組を理解して笑えるようになることです(笑)さらに最初で最後になるであろうアフレコに挑戦しました。『36文字』というタイトルで、子供とお父さんが昔の文字を使ってオリジナルの物語を作っていくお話なのですが、この声の演出が想像以上に難しかったです。私は父親の声を担当したのですが、練習を始めた頃は単調でメリハリがなく、まるでお経のようでした(笑)

しかし中国語のセリフに慣れてくると、父親の場面場面での細かな心情まで考えられる余裕が出てきて、作業が楽しくなっていました。声で表現することはこんなにも神経を使うのだなと学びました。(他にもエアコンの音や紙の音が入らないようにしたり、空腹で鳴る音を押さえたり笑)資料の準備、映像の編集などなど協力して下さいた皆様に感謝申し上げます。

また今年の夏、初めて上海に1カ月留学しました。ビザの申請、中国の大学へのコンタクト、飛行機チケットの手配など全て自分で手続きして大変ではあったけれど、どの準備も新鮮でした。上海に降り立つまで緊張でガッチガッチでしたが、いざ到着してみると緊張する暇もなく計画したとおりに動くことが出来ました。また1人で生活することも経験がなかったので普段の日本での暮らしがいかに良い環境であったかを改めて感じました。両親に感謝です、本当に。そして数日後やってきたベラルーシの美人留学生とも仲良く生活し、充実した時間を過ごせました。授業では2週間経ったところから、先生の話が聞き取れるようになりました。更に更に自分でも驚きの、中国国内旅行に1人で行って来ました。(場所は武陵源です。)そこでも様々なトラブルにぶつかって、人生初めてのギリギリの生活を体験するなど、精神面において大変鍛えられました。中国の団体旅行ツアーに申し込んだのですが、感想としてはまるで運動会のように、他のお客さんと一致団結した熱い熱い旅行に行っていました。旅の間は雲南省から来られた11人家族の方々と行動を共にさせて頂き、人の温かさを感じました。ただ行く先々での中国の行列は並ではなかったです(笑)

短い留学ではあったものの内容の濃い時間を過ごしました。現地でしか味わえない雰囲気や文化の違いを肌で感じる事ができ、最高の夏となりました。またたくさんの方々に助けて頂き心から感謝する夏にもなりました。本当にありがとうございました。

## 山田 実奈 (2年)

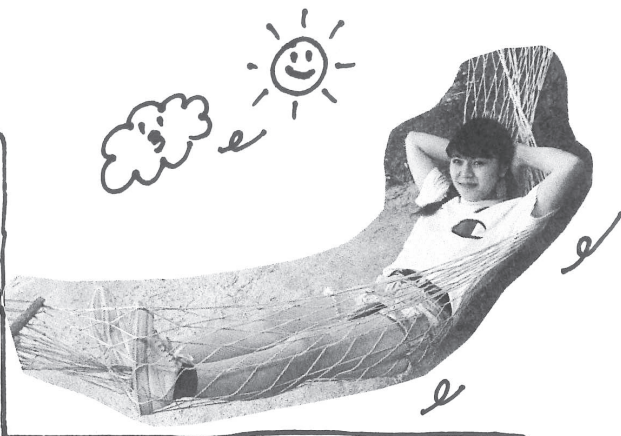
今回初めて映画字幕に参加しました。1秒4文字という文字制限があり、伝えたいことを文字制限内で伝えることがとても難しかったと感じました。そして、細かなニュアンスも考えることが大変でした。

合宿では最初のほうはあまり意見が言えませんでした。しかし、勇気を出して言ってみると、意見を取り入れてもらえたりして、段々と楽しくなってきました。みんなで一つのセリフについて考えて、ぴたりくる訳が見つかった時は嬉しかったです。

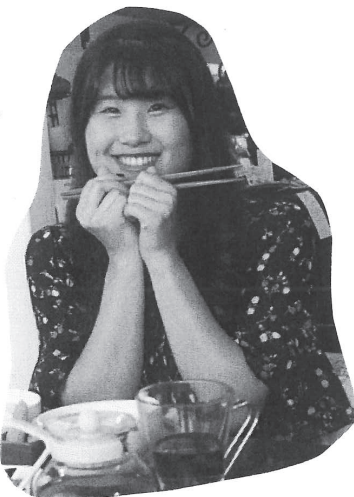
そして、一つのセリフだけではなく、映画全体を通してわかりやすく訳すことが大切だと感じました。これから字幕付きの映画を見るときにただ映画を見るだけでなく、どういう言葉を使っているのかも見ていきたいです。

字幕を付けるときに、何回も同じシーンを繰り返して聞くので、リスニングもできたり、授業で学ぶ文ではなく、話し言葉の文なので、こういう風に使うのかと勉強にもなりました。

前から映画を見ることは好きでしたが、この合宿に参加して、もっと好きになった気がします。自分たちがつけた字幕映画がスクリーンで流れると思うととても楽しみです。



## 増永 奈央 (2年)



私は今回初めて字幕勉強会に参加しました。中国の映画を観たことがあまりなく、どんなものなのかとワクワクした気持ちで参加した勉強会ですが、授業で習った語彙や表現が数多く出てきて、理解できたときの喜びを感じました。また、映画ならではの、実際の日常生活の中でよく使われるような固くない中国語の表現を学ぶことができたのが新鮮でした。完璧な文法から成り立つ中国語というよりは、主語が抜けていたり、多少省略されていたりするけれども、映像だからこそ理解できる部分が多くありそれを学ぶのが面白かったです。会話の中ではこんな使い方をするのだと気付くことがあって、自分も実際にその表現を使ってみたいと感じました。中国語から日本語に訳すという作業は今までも授業でたくさん行ってきたのですが、今回は字幕付けということで訳したものを日本語でコンパクトに表現しなければならなかったのがそれが難しく、苦戦しました。観てくださる方々が一瞬でその文を理解できるように字幕を付けるので、上手くまとめることの重要性を感じました。そして、これから中国の映画をたくさん観てみようという思いになりました。

## 清瀬 彩喜 (2年)

去年の夏合宿に参加させていただきましたが、今年から本格的に字幕製作の活動を始めました。去年は先輩方の推敲作業をただ見ていて、表現力や語彙力のギャップに感心していただけでした。しかし今年自分たちで字幕を作成してみると、文法に忠実に訳すこと、日本語らしく訳すこと、文字数の限界を考えながら訳すこと、それぞれに違った難しさがあり、また面白さもありました。中国語の単語のボキャブラリーの少なさや文法学習のあいまいさを実感し、向上心にも繋がりました。教科書で学ぶ型にはまった文法や会話ではなく、映画を使って学習することで、より人間らしい、生の中国語を学ぶことができているのではないかなと思います。今年は夏合宿には残念ながら参加できませんでしたが、後期の授業からまた表現の幅を広げていけたらなと感じています。





## 太田 梨沙 (2年)

三百斤、  
没问题！

ようこそ！



今回初めて中国語映画字幕に参加しました。

普段映画を見ていて、知っている文法や単語が出てきた時に、この字幕の訳は少し違うのにどうしてかなと思うことがありました。だけど今回、中国語映画字幕に参加してみてその理由が分かりました。限られた文字数の中で分かりやすく表現しなければならないことや、前後の話の流れを乱してしまわないように字幕をつけることなど今まで映画を見ていて考えたことがなかったことだったので難しかったです。そして字幕をつける段階になって気づいたのが、映画の会話の中で繰り返し出てくるキーワードのような言葉でした。使われている言葉は同じだけどその場面によってニュアンスが違ってたりするので、同じ訳に揃える時にどの言葉にしたらいいのかとても迷いました。初めて映画を見たときは表情から喜んでる場面なのか、怒ってる場面なのかを感じ取ることができて精一杯でした。でも、みんなで訳をしながら何度も何度も見ていくなかで、だんだん面白い場面や端っこにいる登場人物にも気づくことができるようになってきました。そして聞き取れる単語や文章が増えて、嬉しくなりました。合宿では、先輩方が本当に優しく寝るのがもったいないくらい楽しかったし、勉強になりました。

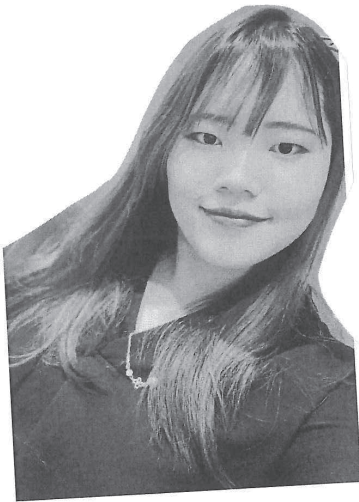
## 田口 祐希 (2年)

私は去年も字幕制作の合宿に参加しましたが、今年は去年とは違って中国語から日本語に翻訳する作業にも4月から毎週参加することができました。毎週の翻訳作業では、字数制限はなく、自由に翻訳することができましたが、映画に字幕を入れる作業では1秒に4文字という制約があり、中国語を生かした日本語訳をすることがとても難しかったです。今まで字幕をただ日本語に訳したものだと思っていたので、字幕制作の難しさに驚きました。去年は先輩方の作業をただ見たり、中国語の中のわかる単語を聞き取るといった参加しかできませんでしたが、今年は去年よりは理解できるようになっていたのも、少しではありますが、発言をすることもできました。一つ一つの訳を丁寧に直していく作業で、自分にはなかったアイデアや、よくわからなかった中国の文化を知ることができて興味深かったです。

今年は手探りの状態でスポッティング作業などをしたので、来年は今回の経験を生かして字幕制作に取り組みたいと思います。



## 満永 みなみ (2年)



私は今回韓国語コース唯一の参加者でした。参加前は私の中国語のレベルに多少不安を感じたりしました。しかし、始めてみると授業で勉強した言葉がセリフとして実際に使われている事で中国語の勉強になるし、自分たちで字幕を作るという事がとても新鮮で楽しかったです。作業を通して映画を何回も見てるとだんだんと内容やセリフが頭の中でつながってきて、新しい発見をすることが多かったです。

合宿にも参加しましたが、合宿では主にセリフ1秒につき4文字を入れるという作業の繰り返しです。私は毎週のように海外ドラマを見て、楽しみながらをモットーに語学の勉強をしています(驚かれる程これに関しては熱心です)。日頃私が見ている字幕はこんなに大変な作業を経ているんだなあと、ドラマを見るたびに思い出しました。合宿での作業は集中力との戦いでなかなか大変な面もありました。しかし振り返ってみると合宿を一番楽しんでいたのは私じゃないかなと思います。



## 白水 優衣 (1年)

今回この合宿に参加して、字幕をつけることの大変さや難しさ、そして字幕をつけるという作業の奥深さを感じました。今まで字幕について深く考えたことがなかったので、字幕をつける上で守らなければならないルールがあることも知りませんでした。

実際に自分たちで字幕をつけてみて、一番苦戦したのは字数でした。限られた字数の中でいかに的確に内容を伝えられるかが求められ、皆で話し合いながら作業しました。助詞一つ変えるだけでも意味が変わったり、ニュアンスが変わってくるので、その台詞や場面の印象も大きく変わる、ということがわかりました。普段何気なく字幕付きの映画を見ているけれど、その台詞や場面の一つ一つには字幕をつけた人々の苦労や思いが込められているのだらうなと思いました。中国語から日本語に翻訳するという意味でもいろんな解釈ができて難しいと思う一方で面白いなとも感じました。10人いれば10人が違った訳をし、字幕をつくるという、そこに楽しさや面白みがあるのではないかなとこの合宿を通して思いました。とても良い体験ができたと思います。今回のこの経験を生かして日々の中国語の勉強もさらに頑張っていきたいです。



## 原田 優希 (1年)



おさげ  
大好き♡

今回字幕勉強会に参加して、私たちが普段何気なく見ている字幕をつくるのが、こんなにも大変だと思いませんでした。言いたいことを全て言おうとすると字数制限を超えてしまうので、何を出すか絞るのが大変で頭を使いました。私は洋画などを見るときに字幕を出すと、訳に違和感を持ったり、言っていることと違うと感じたりすることが多かったです。しかしこの合宿に参加して、それは意図を持ってやっていることだとわかりました。私たちはグループで作業をしましたが、これを一人でやっているプロの方はすごいなと思いました。

朝から夜遅くまでずっと字幕をつけるのはきついなと思うこともありましたが、しかし目に見えて進捗が分かって、完成したときの達成感はとても嬉しいものでした。そしてずっと見ているうちに、言っていることが少しわかるようになり、リスニングの力が向上したように思いました。

字幕を付けることがこんなに難しく、大変だとは思いませんでしたが、とても良い経験になりました。サポートしてくださった先生方や先輩方、ありがとうございました。

## 松村 妃奈美 (1年)



私は少し前から中国語に興味をもっていますが、中国語を習いたてなのに夏休みに独自で勉強するのは厳しいと思い、今回の字幕合宿の参加を決めました。もともと勉強が苦手な私にとって、最初の字幕付けでは何をしているのかさえ分からず理解に苦しみましたが、その後の一年生だけの字幕付けによって少しずつ字幕の付け方がわかりました。最初全員で集まって字幕付けをしているときは、内容が難しかったのはもちろんですが、発言するのが恥ずかしいという気持ちもあり、なかなか発言することができませんでした。しかし、一年生だけで字幕付けをしたときは恥じらもなく、みんなでたくさん発言し合って完成させ、とても楽しく字幕をつけることが出来たと思います。その甲斐あってか、二日目の全員での字幕付けでは発言はできなかったものの、全く理解できていなかった一日目と比べて真剣に字幕付けに参加することができました。私たち一年生が字幕を付けたアニメーションの完成形を見てみると、達成感を感じることができました。この三日間の字幕合宿で学んだことは、映画やアニメーションなどの字幕の付け方と中国語を学ぶ楽しさ、そして中国語の素晴らしさです。今回、この字幕合宿に参加できて良かったと思っています。



## 宮川 方孝（1年）



今回字幕合宿に参加させていただきありがとうございました。この合宿で自分は中国語の文法以外に学んだことがあります。それは、集団の中の話し合いで自分の意見・考えを述べることの難しさです。自分は一年生で中国語の知識はまだ浅はかで、そもそもこの合宿で役に立つかどうか不安でしたが、作業内容が字幕の推敲と聞き少しは字幕作成の力になれると思っていました。しかし、実際の作業の中では、多くの先輩方の前で全然自分の意見を述べることができず、本当になんの役にも立たないままこの合宿を終えてしまいました。また、わざわざ一年のためにアニメーションの字幕付けの作業も用意していただいていたのに、同学年の友達たちの前でさえもあまり自分の意見を述べるできませんでした。正直、知識と経験が豊富な先輩方と発想が豊かな友達たちを前にして、ユニークな考えが思い浮かばなかったというのも発言が少なかった理由の一つではありますが、その中でも何か所か考えが思い浮かんだところもあり、それを恥ずかしさや自分の意見の正当性を気にして発言につなげることができなかったことが意見を述べるができなかった一番の理由です。集団での話し合いは今後の大学生活の中でも数多くあるだろうし、就職の際にも必要なことであると思います。その難しさをこの合宿で感じるようになるというのは予期していなかったのですが、そのような経験もさせていただき、自分の中では意味のある合宿になったと思います。ここでの経験を必ず今後の自分の成長につなげていきたいです。



## 井上 和真（1年）



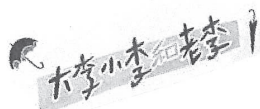
今回、普段授業でしか中国語に触れる機会がないという事もあり、もっと中国語に触れたいという理由で2泊3日の字幕合宿に参加させていただきました。合宿で映画を観て、ただ字幕を見て内容を理解するだけでなく音を聞いて単語を理解しようと思いついていてと授業で習った単語など少しわかる所もありましたがネイティブの発音に慣れていなかったり語彙力が足りないというのもあり、なかなか聞き取ることができませんでした。他にも中国人の先生に自己紹介した時も、自分の名前ですら正しい発音が出来ず通じなかったのが悔しかったです。これからは今まで以上に単語や声調、ピンイン、中国語の聞き取り、発音など勉強しなくてはいけないなと思い、とても良い刺激になりました。

小鯉魚跳龍門の一年生の制作では自分の、言葉をうまくまとめる力が足りないというのがありますが、周りの意見にすぐに賛成したり、周りの批判や目を気にして自分の意見がうまく言えなくて消極的になってしまった事が今回の個人的な反省です。全体としてはうまく字幕がまとまり、硬すぎずユニークな字幕が出来上がってすごく良かったし、終わった時の達成感はず良かったです。

作業中以外では学科の友達や先輩など、距離が縮まったり留学の話、就職の話など普段なかなか聞けない貴重な話を聞くことができたのも本当に良かったです。先輩方がとても優しく話しやすいだったので1aは本当にいい学科だなと改めて感じました。

今回の合宿での出来事は夏休みのとてもいい思い出になったので2年生は大変だとは思いますが来年も参加できたらいいなと思いました。3日間本当にお疲れ様でした。





## 奥窪 佑泉 (1年)



今回、中国語の上達や字幕付けに興味があり、中国映画字幕勉強会に参加しました。そして、様々な事を学ぶことができました。

まず、字幕を付けることへの難しさを感じました。普段、韓国ドラマなどで字幕を見ていて、字幕付けをしてみたい、字幕付け楽しそうだなって思ったことがありました。けれど、実際に字幕付けをしてみて、とても難しく、大変だなと感じました。言っていることをただ直訳するだけではダメだと言うことを知りました。台詞が流れている時間に合わせて字幕の字数を考えなければならぬのが1番大変でした。言葉を考えても字数オーバーになったり、なかなか良い言葉が思い付かなかったり、語彙力もとても必要だなと思いました。また人の名前や話口調を揃えたりすることも大事だと知りました。字幕付けを初めて自分ですべて、字幕付けはとても大変な作業ということがわかりました。

しかし、字幕付けをして大変なことばかりではありませんでした。字幕付けをするために何回も台詞を聞いたことで、少しずつ中国語が聞き取れるようになっていったと思います。初めは、久しぶりに中国語に触れたこともあり、なかなか知っている単語でも速くて聞き取ることができませんでした。でも、何回も聞いているうちに最初は聞き取れなかった単語も聞き取ることができて嬉しかったです。

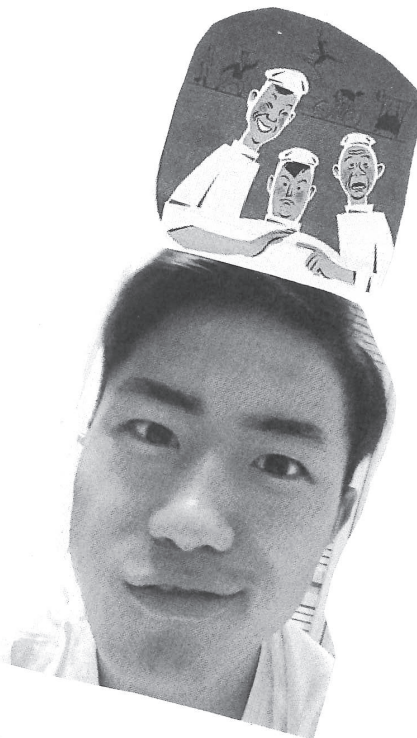
このように、中国映画字幕勉強会に参加し、字幕付けは大変だったけれども、その中で嬉しさや楽しさを感じることができ、とても良い経験をすることができました。参加して良かったと思いました。そして、もっと中国語を聞き取れ、理解できるようになりたいと思いました。

## 神代 新 (1年)

今回、中国映画字幕作成研修に参加させて頂いて、とても充実していたと感じた3日間でした。意気込みとしては学びに行こうというものですが、研修では見る・知るだけでなく参加して考える・発信するなど自分の考えていたよりもたくさんの事を学べて帰ってこれたという印象が強いです。

1年生のみで字幕作成した「龍門を飛び超えろ！」では字幕作成の大変さを感じました。中国語と日本語は見た目は似ていますがやはり違う言語であるので、当然異なることの方が多いです。翻訳する際にとても感じたのは文字数制限の大変さとニュアンスの大切さです。出てきた言葉をそのまま翻訳すると当然、文字数を超えるのでそこから添削します。しかし少ない言葉で気持ち、状況などの情報を見る側に与えなくては行けないので翻訳して削ったり、根本を変えて意識するなどしました。また、挨拶ひとつとってみても日本ではおはよう、こんにちは、こんばんわなど時間によって使い分け、挨拶だけでも時間の情報が入ってきますが英語のHelloなどはほぼ意味はなく呼びかけのような意味合いであります。その言葉の持つニュアンスだったり意味、情報を日本語に置き換えるという作業は難しいものですがその分、達成感を感じることが出来ました。

今回の合宿では言葉を翻訳することは言葉の持つ情報を損なわず、伝わりやすく相手に与える必要があることを感じました。字幕になるとそれをいかに短く伝えられるかというところが求められて、字幕映画の奥深いものを知れたと思います。字幕作成はあまり陽の目をあびる仕事でもないですが映画の評価を大きく左右する大事な役目です。そんな字幕作成に今回携わり言語の差異なども知ることが出来て本当に感謝します。これからの言語学習にも生かすことのできるものなので大切に吟味していきたいと思っています。







## 渡辺 夏海 (1年)



今回今後の中国語の勉強に少しでも役立つ様にと、この中国語の字幕合宿に参加しましたが、自分が予想した以上の、レベルの高い中国語を使わなくてはならない字幕付けだったので、活動についていくことができませんでした。

私は、いつも受ける中国語の授業の様に学びながら、映画に合う日本語訳を考えるものだとか軽く考えていたし、また、自分の能力では少しも活動についていけなかったもので、字幕付けは少し辛く感じました。

しかし、1年生用に少し簡単なアニメーションの字幕付けも用意されていたおかげで、初めて自分の意見を出すことができました。

そのアニメーションの字幕付けでは、映画の字幕付けの時とは違い、1年生が皆発言できていて、意見を言い合うことができ、訳を考えながら楽しく中国語を学べました。

映画の字幕付けも、ずっと同じシーンを見ていると簡単なフレーズを覚えることができたし、少しは中国語のリスニング能力が向上した様に感じ自信がもてました。

また何より先生方、先輩方が私達1年生でも字幕付けに参加できるようサポートして下さったので、本当に助かりました。同じ学科でも話したことのない人とも仲良くなり、仲が良かった友人との仲も深まり合宿では本当に良い経験をさせていただきました。

## 里森 麻美 (08番台) 卒業生

卒業して中国語に触れる機会が少なくなっていましたので、字幕制作に参加したことは久しぶりの良い刺激でした。グループでの字幕制作は、自分だけで見ても気づかないことまで学べ、異国の映画にじっくり向き合うことができます。細く長く学び続けることの大切さを改めて感じました。



## 雷 静 (九州産業大学修士)

首先、我对给予我这次学习机会的间老师和甲斐老师表示诚挚的谢意。让我能够幸运的在福岡大学，和喜欢中国文化的同学们，一起愉快的学习电影字幕翻译课程。间老师授课非常认真，细致，耐心。福岡大学的同学们也是认真踏实的学习。这种学习氛围感染了我，更加带动了我继续翻译学习的积极性。在电影字幕翻译的学习中，我意识到不但要准确无误的翻译原文，还要用词简洁易懂，反映人物个性和激发观众情感尤为重要，让我学到如何选择恰当的词汇和日语的语言表达，加深了我对日本文化的理解，促使我进一步加深学好日语。其实，我在大学院时的毕业论文就是中国1937年到1942年期间，上海（孤岛）时期的电影史。我本来对电影就很感兴趣，这次很高兴能够参与电影字幕翻译学习。我喜欢间老师的风格，希望和间老师继续坚持学习下去。

まず、私は今回この勉強の機会をくださった間先生と甲斐先生に感謝致します。福岡大学で、中国文化が好きな学生達と一緒に楽しく映画字幕翻訳の勉強ができことは大変幸せでした。間先生は勉強会の際、辛抱強く、丁寧に、分かりやすく、皆さんが分かるまで説明していました。福岡大学の皆さんもじっと勉強していました。この勉強の雰囲気は私を感化し、継続的に翻訳を勉強しようとする意欲を呼び起こしました。この勉強を通して、翻訳文は正確に原文を翻訳するばかりでなく、簡潔で分かりやすく、人物の性格を表現し観客の感情を呼び起こすことが大事だと学びました。どうやってぴったりの日本語を選ぶのかの勉強が、私をもっと日本文化に対する理解を深め、更に一層奥深く日本語を勉強するよう促しました。実は、私の修士論文は1937年から1942年までの上海＜孤岛＞時期の映画史でした。私は映画に深い興味を持っていますので、今回映画字幕翻訳の勉強ができて大変嬉しく思います。私は間先生の風格が大好きで、これからもずっと間先生と勉強を続けていきたいです。

### ●福大生による東アジア映画字幕制作（第9回）参加メンバー

小串六美、中願寺桃佳、花田優希、小野沙也香、今村紀秋、太田梨沙、清瀬彩喜、田口祐希、満永みなみ、増永奈央、山田実奈、井上和真、奥窪祐泉、神代新、白水優衣、富永優菜、原田優希、松村妃奈美、宮川方孝、渡辺夏海、中川すみれ、溝上歩、田代菜穂（福岡大学人文学部東アジア地域言語学科）、徐達然（福岡大学工学研究科）、里森麻美（卒業生）、種村理恵（卒業生、九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程）、雷静（九州産業大学修士）、甲斐勝二、間ふさ子（教員）

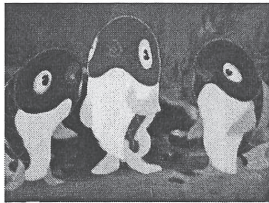
協力：張璐（福岡大学非常勤講師）、房瑞麗（中国計量大学副教授）



## 第9回 福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会

13:35～13:54

### 龍門を跳び越えろ《小鲤鱼跳龙门》



上海美術電影制片廠1958年作品 日本語字幕・19分

監督○何玉門

脚本○金近

撮影○段孝萱

・1959年第一回モスクワ映画祭アニメーション部門銀盾賞を受賞したセルアニメ。

ものがたり

小さな川に住む子どもの鯉たちが、おばあさんから「登龍門」の話を聞き、自分たちも龍門を越えよう冒険の旅に出る。苦勞のあげくようやく「龍門」に辿りついた鯉たちは、自らの力でそれを越えることができた。そこは天国ともみまがう場所だった。喜ぶ鯉たちは燕に頼んでおばあさんに知らせてもらおうとするが、実は鯉たちが飛び越えたのは完成したばかりの「龍門ダム」だった。

13:54～14:05

### 三十六文字《三十六个字》



上海美術電影制片廠1984年作品 日本語吹き替え・11分

監督○徐景達

脚本・キャラクターデザイン○阿達

撮影○王世栄

・1986年、第7回ザグレブ国際アニメーションにて教育映画賞受賞作品。

ものがたり

父が子どもと一緒に、ある男の冒険物語を作りながら、水、山、舟など中国の代表的な象形文字の意味や生成の由来を説明していく、アニメーションの特徴をうまく利用した作品。

14:15～15:38

### 李さんスポーツ奮闘記《大李、小李和老李》



上海美術電影制片廠1962年作品 日本語字幕・83分

監督○謝晋

脚本○于伶、謝晋、伍黎、葉明、梁延靖、姜榮泉

主演○大李：劉俠声

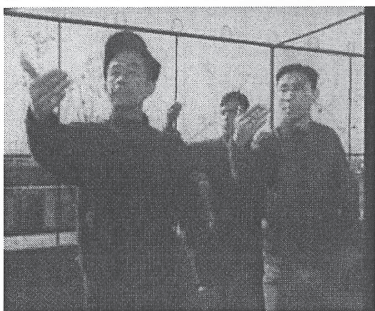
小李：姚德冰

老李：范哈哈

ものがたり

上海の肉類加工工場で働く大李には持病の腰痛があり、腰が痛むと必ず雨になるので「气象台」というあだ名がついている。

スポーツにはまるで縁のない大李だが、どういう風の吹き回しか工場の体協主席に選ばれてしまった。根がまじめな大李はその職務に積極的に取り組んでいく。ところが上司である老李は仕事一本やりで職場のスポーツ振興には全く理解がない。大李は、老李の息子・小李とともにあの手この手で老李を説得しようとする……。



この作品を監督した謝晋(1923-2008)は、いわゆる「第三世代」の監督で、1940年代から60年にわたって映画の創作に携わり、多くの作品を生み出した。とくに「紅娘子軍」(60)、「舞台姉妹」(64)、「海港」(73)、「天雲山伝奇」(80)、「牧馬人」(81)など、一貫して時代を反映した作品を作り続けてきたことで知られる。文革を描いた「芙蓉鎮」(86)、日本人残留孤児の物語「乳泉村の子」(91)などは日本でもヒットした。この作品は彼の数少ない喜劇映画の一つである。

第9回福大生による東アジア映画字幕制作成果発表会リーフレット

福岡大学人文学部東アジア地域言語学科 2017年9月23日発行

制作：太田梨沙・清瀬彩喜・田口祐希・増永奈央・満永みなみ・山田実奈・間ふさ子



## フィルムの修復などテーマに 福岡市で映画祭関連行事

フィルムからデジタルへ映画の記録技術が変わり、過去のフィルムの保存や修復は世界の映画界にとって大きな課題。23、24日に福岡市総合図書館（早良区百道浜）などで開かれる「レストレーション・アジア Vol. 4」は、デジタル保存や修復に関わる国内外の専門家を招いた珍しいイベントだ。

24日午後1時からのワークショップでは、東京国立近代美術館フィルムセンター参事で、国際フィルム・アーカイブ連盟元会長の岡島尚志さんが基調講演。日本、カンボジア、シンガポール、欧州などの現場を知る技術者らが現状や

対策を紹介する。

デジタル修復が施され、アジアフォーカス・福岡国際映画祭で披露される1954年のタイ映画「サンティとウィーナー」（23日午後4時）の上映後にはシンポジウムを開催。タイフィルムアーカイヴや保存・修復に携わるコンサルタントらが取り組みを話す。参加費などの問い合わせは福岡市総合図書館＝092（852）0600。

福岡大東アジア地域言語学科のグループは23日午後1時半、福岡市中央区天神のエルガーラホールで字幕制作成果発表会を開く。参加無料。



「李さんスポーツ奮闘記」の場面

工場のスポーツ担当になった主人公が、理解のない上司を参加させようとする「李さんスポーツ奮闘記」（62年）、モスクワ国際映画祭アニメーション部門銀盾賞を受賞したセルアニメ「龍門を跳び越えろ」（58年）など、中国の3作品を字幕付きで上映する。間ふさ子教授は「少ない字数で表現する字幕の難しさを行間から感じてほしい」と語る。（飯田崇雄）

西日本新聞2017年9月22日記事